

複式学級における算数科の指導計画の作成について

1. 複式学級の指導計画作成の基本的な考え方

指導計画の作成にあたっては、複式学級の場合であっても、それぞれの学年の指導内容の配列順序は、教科書とほぼ同じような配列順序で作成している場合が多いのではないのでしょうか。

その最大の理由は、算数の学習は、児童が既に学習した事柄を用いて課題を解決し、そこから新たな事柄を学んでいくというように、その系統性を大事にしながら指導していかざるを得ない教科であるからです。従って、教科書の単元配列を変える場合には、学習の系統性を十分考えて変更しないと、十分な学習効果が期待できないということが起こってくることに注意しなければなりません。

ところで、「小学校複式学級指導資料」（文部科学省、平成7年10月）には、複式学級における指導計画の作成について、次の3点からの説明が述べられています。

- (1) 教育課程の編成の特例を生かすこと
- (2) 同単元指導を可能な範囲で取り入れること
- (3) 直接指導及び間接指導の長所を生かすこと

このうち、(2)の「同単元指導」を採用しての学習指導がよく見かけられます。「同単元指導」というのは、複式学級において共通な内容や類似な内容を用いて指導をする形態のことです。このような「同単元指導」の良さには、次のような点があると説明されています。

- * 上・下2個学年に同一の素材を与えることができ、それぞれの学年に適切な課題を取り出す展開が可能になり、異なる学年の児童が同じ雰囲気の中で学習を進めていくことができる。
- * 下学年の児童にとっては、学習内容について見通しをもつことができる。
- * 上学年の児童にとっては、既習事項と現在学習している内容との関連が明らかになり、理解をいっそう確実なものにすることができる。
- * 数学的な考え方や原理を中心に指導を進めることができ、指導しやすくもあるし、効果的である。

しかし、教科書を見ると、同じ時期に2個学年の指導内容が、必ずしも共通な内容や類似な内容になってはいません。ですから、下学年と上学年の内容を組み合わせたり、配列したりする際には、既に述べたように、算数の内容としての系統性や順序性について十分配慮をする必要があります。

2. 「同単元指導」を目指した指導計画の作成

本資料は、教科書の系統的な単元配列を重視しながら、1・2年、3・4年、5・6年編製の複式学級における指導計画を作成してみました。その際に、できるだけ「同単元指導」ができるようにと、系統性や順序性を考えながら教科書の単元配列を一部変更してみました。ただし、児童が教科書を使用して学習するという立場で考えると、2個学年で同単元、同領域での組み合わせは極めて難しいといえます。各学年の教科書が1冊であるので、単元の移動がより自由になったということであっても、それぞれの単元の指導時数が異なるため、ある単元を同じ時期にそろえて学習するようにしても、それ以後の単元の組み合わせがうまくいかない場合が多々あります。各学校では、児童の実態や指導の経験を生かしながら、より効果の上がる柔軟な指導計画の作成を試みるようにしてください。

3. 複式学級の指導計画作成や指導上の留意点

上記の考え方に立って資料の作成をしましたが、その際の作成上の留意点や今後指導する際に配慮すべき点などを挙げておきます。

- (1) 教科書の指導内容の系統はできるだけ崩さないようにして、2個学年（1・2年、3・4年、5・6年）のそれぞれが、同じ領域の指導内容を同時に指導できるように一部の単元について組み合

わせて配列しました（次ページの下線部が、同領域の内容に配慮した箇所です）。また、時数の調整のため、「読み取る力をのばそう」などの特設ページの位置を変更したところもあります。

- (2) 教科書の単元を移動した場合、その後に出てくる「ふくしゅう」の問題に未学習である問題が出てくる場合がありますので、注意してください。
- (3) 学校教育法施行規則に示されている算数科の年間授業時数は、第1学年が136時間（週当たり4時間）、第2学年175時間（週当たり5時間）と異なります。そこで、2年生が算数の学習をしているときに、1年生は算数の学習がないということが起こってきます。このことへの指導の工夫が必要になります。
- (4) 「同単元指導」といっても、単元のはじめから終わりまで共通のねらいを中心として指導できるとは限りません。指導のねらいや内容に応じて、学習過程の工夫が必要となります。
- (5) 教科書にある単元の指導順序を変えて学習を進める場合にはその旨を早めに児童に知らせておく必要がありますし、保護者にもその趣旨および変更点を前もって知らせておく必要があります。
- (6) 複式指導では、授業の進度等をそろえたり、児童の学習の様子などから再学習の機会を設けたり、学習したことをより定着させたりということから、時間調整の必要性も出てきます。予備時数の使い方も合わせて考えるようにする必要があります。
- (7) 複式学級は小規模で少人数学級ですので、1学年の人数は極めて少ない場合があります。従って、上学年の児童が下学年の児童の分からないところを教えるなど、学習の仕方の工夫が必要となります。
- (8) 2個学年が「共通のねらい」で指導できるときには、素材や導入の仕方にも工夫ができます。異なる学年の児童が同じ雰囲気の中で学習が進められるような配慮が大切となります。
- (9) 本教科書では、それぞれの学年には、各学期の単元指導時数の他に、次のように予備時数を設けて編集してあります。実際の指導に当たっては、これらの予備時数を有効に活用できるよう考慮して指導することが大切となります。

本教科書における各学年の予備時数一覧

（通常学級の指導計画の場合）

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年
1学期	4	10	6	5	8	19
2学期	9	13	14	7	6	15
3学期	4	5	7	5	11	14